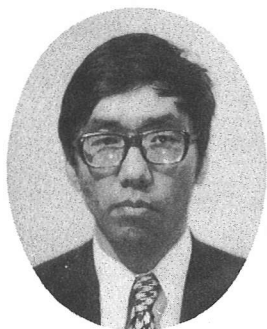


地すべり雑感



佐々木康二

㈱ダイヤコンサルタント仙台支店 支店長

学校卒業後、私は仙台の小さなコンサル会社に勤め、東北の多数の地すべりを調査する機会を得ました。それは東北大の河上先生のお世話によるもので、東北工大の土木工学科の講師も務め、この時期（昭和45年～昭和50年）に地すべり研究の面での工大の浅田先生、並びに盛合先生のご指導によるものでした。

剪断試験機を改良して、すべり面粘土の残留強度試験について工夫を凝らしたのも、また、特に地質学者である盛合先生と土木工学出身の私は、お互いの境界領域の研究対象として“地すべり現象”を据え、精力的に研究論文を発表したのもこの頃でした。

一方、地すべり博士の高野秀夫氏から「地すべりは、過去にどのような歴史を持ち、今後どのような経過、発展を辿るかが、踏査した時点で解らないと、調査計画も防止対策も立てられません！」と言われて、途方に暮れた事を思い出します。

広大な地形の変遷過程の判読が、その地すべり発生メカニズムの解明に不可欠である事を納得するまで、実験室育ちの私には少々時間が必要でした。

空中写真の判読による地形の変遷の読み取りは、マスウェスティングとしての地すべりの運動形態変遷のそれと重なるので、この判読とそれを基にした丁寧な現地を観察により、大部分の地すべりのメカニズムは、ほぼ間違いなく判別できる事を会得したのもこの時期でした。

人間の脳細胞の“計算”の領域が考え出した試験や計測のデータのみに基づいて、地すべりを解することは困難な事でありませぬ。“計算”は言葉であり、既にその働きの中に嘘のデータが混在している事が多いからであります。

地すべりの安定問題（力学的解析）につ

いて、例えば、コンピュータを使用したF.E.M解析の手法等は、なるほど解析自体は細かくなっているが、その結果の“精度”は、現地観察による人間の「イメージの力」に比し、遠く及ばない例が多い。

言い方を変えれば「イメージの力」なしには、見掛け上いくら精密な解析に見えても、精度は一向に上がらない。(コンピュータによるF.E.M.の解析法自体が非難されるいわれはない。)

目があるからといって、何でも見えるとは限りません。

名画と言われる絵画、例えば、セザンヌやルノワールの絵の色彩、彼らの自然を見る目に比べれば、我々の目など盲も同然と言っていていいでしょう。

振り返って、私は学生時代に多くのすばらしい教師との出会いに恵まれました。

中央大学では、名講義の令名を馳せた水理学の林泰三先生、塑性理論の碩学である山口伯樹先生、卒論の指導教官の星埜和先生、名神高速道を手がけられた久野悟郎先生、東北大学では恩師河上先生、修論の指導教官の小川先生、同じ土質研究室の柳沢先生、森芳信先生、並びに前記した浅田、盛合の両先生等の善き教育者、善き研究者である方々との邂逅は「不亦楽乎」と天に感謝しております。

プロフィール

昭和17年6月17日生 54才

昭和40年3月

中央大学理工学部土木工学科卒業

昭和45年3月

東北大学大学院工学研究科

修士課程 土木工学専攻修了

昭和45年4月

(株)ジオテック入社

昭和50年7月

(株)ダイヤコンサルタント入社

趣味：パイプオルガン、スキー

